30

華岡流医師，進藤寛策について
――麻沸湯はクロロホルムよりも優れている――

土手健太郎，矢野　雅起，藤谷　太郎，高石　　和
愛媛県立中央病院 麻酔科

【はじめに】 明治になり，華岡流の麻沸湯麻酔は，急速に滅び，クロロホルム麻酔に取って代わられたと言われている．そこで，麻沸湯麻酔とクロロホルム麻酔を比較した研究について検索したところ，いくつかの研究が見つかった．今回は，明治中盤の進藤寛策の記述について報告する．

【方法】 華岡青洲とその弟子たちの業績の中で，麻沸湯麻酔とクロロホルム麻酔を比較した進藤寛策について，彼の生涯と記述について，資料を収集し検討を加えた．

【結果】 1. 進藤寛策について　　進藤寛策は，嘉永二年　肥前東松浦郡鏡村原に生れ，長じて唐津の橘葉医学館に学び，次いで多久の草場船山の門に入った．その後，慶応三年に大阪に出て合水堂に入塾し，華岡良平に就て医術を修め（合水堂での最後の全身麻酔下乳癌手術は明治四年八月で，これを見学・参加したと思われる），明治二十年，帰郷し鬼塚村で開業した．当時は近代医学創業時代で大いに名声を博し，地元では外科の名手と言われ，華岡流を用い多くの手術を手掛けた．明治四十二年死去．戒名は積徳院釈法敬居士，蓮光寺に葬られた．墓所は市和多田片草の丘（現在の，唐津市和多田）にあり，玉垣は鬼塚村民有志の拠金に依るもので，近隣の人々はその人徳に慕い寄った．唐津で，地域医療に貢献した遠藤竹之助，松尾房二の両医師はその門弟である．

2. 進藤寛策が，麻沸湯麻酔の優越性を記述した論文　　進藤寛策は1898（明治三十一）年に九州医学会で「クロロホルムと麻沸湯の比較について（麻沸湯は華岡家の麻酔剤）」を発表し，その論文内容は1899（明治三十二）年に，第七回九州医学会雑誌として刊行された．発表原稿なので，口語体で書かれている．以下に内容を示す．“皆さん，私は大阪の華岡良平に師事し，唐津に戻り外科医院を開業しました．今日は，クロロホルムと麻沸湯の利害を四肢切断術に用いた場合について議論します．クロロホルムの使用方法は皆さんご存知とおもいます．麻沸湯を切断術に用いるときは，麻酔導入に夏は1時間，冬は1時間半かかり，麻酔持続時間は2～3時間です．手術時には四肢の動揺を抑える助手を二，三人必要としますが，麻酔死は全くなく，術中記憶は全くなく，術後の良好な鎮痛もえられます．一方クロロホルム麻酔については，私の義息が精通していますが，クロロホルムの吸入しすぎにより，呼吸循環に悪影響を与え絶命することもあります．麻酔の導入は速いが覚醒も速やかであり，助手が1～2人必要で，また術後に鎮痛剤を必要とする欠点があります．このように麻沸湯とクロロホルムの優劣については明らかと思います．麻沸湯を用いる私は老いてしまいましたが，皆さんの考えはいかがでしょう．私は，毎年多くの患者に麻沸湯を用い切断治療を行ってきました．この間，6人の鎖陰患者の手術を麻沸湯投与下に行いましたが，全員完治し結婚し，2人は子供もいます．このことは，またの機会に話します．”

【結論】 1899年，麻沸湯麻酔のクロロホルム麻酔に対する優越性を示した，唐津の華岡流医師進藤寛策の記述が見つかった．彼は，クロロホルム麻酔が劣っている理由として，1. クロロホルム麻酔は，吸入しすぎで呼吸循環に悪影響を与え絶命することがある，2. 導入覚醒が速すぎる（手術途中で再度麻酔を吸入する必要がある．3. 術後に鎮痛剤を必要とする．の，3点を挙げている．華岡流の名医にとっては，クロロホルム麻酔は危険に見えた．このような医師が死去することで華岡流は滅んだ．